せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 ☎42-2590
第141号・平成13年6月1日

年表で読む 古平の歴史

《48》

カレイ漁

■カレイ漁の始まり

アイヌの人たちは網を作るのに、シナ皮やエラクサなどの繊維を使っていましたが、網でカレイを獲っていたと伝えられています。

古平では、いつごろからカレイ漁が行われたのかはっきりしていませんが、ニシン網やタラ釣りにかかって獲れたものを利用していました。干物にしていたようですが、旬の味として食卓にものっていたのではないでしょうか。明治二年のある漁業関係の報告書に、「去る一月二十一日、後志国古平郡入船町本間金松という者がタラ釣り漁に出たところ、長さ八尺五寸(二・六メートル)肉の厚さ一尺三、四寸(約〇・四メートル)、目方およそ三〇貫余り(一一二・五キログラム)の最大なる『オヒヨウ』を釣った」という記事が載っています。これから見ますと、当時は相当オヒヨウが獲れていたようです。

■刺網でカレイ漁

明治の末ころ、沢江村の保木粂蔵が、カナ糸で作った刺網を本州から持って来て漁を始めたところ、この成績が良かったので、次第にカレイの刺網を始める者が増えてきました。漁業期間は、十二月上旬から翌年の三月下旬までで、ニシン漁の始まるころまで出漁していました。

明治四三年の『古平町治一覧』を見ますと、「鰈産額六二石、価格三〇〇円」とあります。

また、明治四四年の梅野清太郎日記には、カレイ漁について次のような記述があります。

一月五日　鰈網大波をおかして出漁す。いずれも四、五〇貫(一五〇～一八〇キログラム)の漁獲。

一月九日　真冬には珍しい好天気、寒の入り、鰈船朝二時に出漁した。沖合いはるかに漁をしているのが鮮やかに見える。午後三時ころ寄港した。いずれも大々漁、二七〇貫から三百貫、昨年より本年にかけての大漁だった。幸い青森通いの汽船が入港したので直ちに積み込んだ。

一月十一日　船霊祭にも出漁、五、六〇貫以上の漁獲。

一月十三日　スケソの大漁で鰈がかからぬ。岩内にはスケソ漁専門に従事している船もあると聞いた。鰊一匹漁獲のうわさとりどり。

カレイは生函に詰め、むしろで包んで、横二か所、縦一か所縄をかけて輸送していました。

資金の乏しいカレイ業者は、商家から資金を借り入れて着業するのが一般的でした。

■カレイの漁獲高

大正元年、二人乗りの磯船六隻が延縄で二月から四月まで出漁し、漁獲は次のようでした。

(トンに換算)

マガレイ	数量	八・一トン
	金額	二五九円
ソウハチガレイ		四・五トン
		三六円

この年、カレイ手繰網に五反型川崎船八人乗りが五隻、三反型六人乗り一隻、三人乗り保津船一二隻の計一八隻が、六月一日から翌年三月三〇日までの間に七二日間出漁し、次のような漁獲がありました。

マガレイ	数量	三五・一トン
	金額	一、一六二円
イシガレイ		六七・五トン
		一、六二〇円
ソウハチガレイ		四・五トン
		三六円
クロガシラ		九四・五トン
		二、二六八円
スナガレイ		八一・〇トン
		八六四円
合計数量		二八二・六トン

＜次号へ続く＞

大正八年

5／2　沖村へ出かけたが昨年の普請で良くなった、ところどころに雪崩のあとがある、浜のあちこちに流失した刺網がかたまりになって寄っている、刺網のところはみな網洗いをして後片付けをしている、店には延縄の客が十人ほども来る、農園からアサズキをとって来た、新聞では、第二期までの鰊漁獲高として古平四万五千石と出ている。

5／3　朝、あちこちで鰊が一～二杯とれる、綿糸相場は四二〇円と高い、カレ網、鰊刺網とも例年以上の売れ行きが見込まれるが、この値段では今、買い付けする勇気が無い、考えなければならぬ。

5／5　気候が良くなり、外に出ると気が晴ればれする、本陣の伊藤さんが来て、ナシの接ぎ木をしてくれるというので農園へ行く、カメナシ、丸ナシの古いのを切って接いだ、二～三年後には成るだろう。

5／6　沢江、沖村、歌棄方面で二～三杯とれる、群来村本でも二杯とったというので生鰊を貰う、多分これが終わり初物になるだろう。

5／7　金物類の仕入れに小樽へ出たが、その留守中に浜町で大火があったことを電話で聞く、実に残念だ。

5／8　古平浜町の大火を聞いて夢かと驚く、余市一時発の豊丸に乗り二時半に着く、見ると予想以上の大災害である、私の家では店の商品や建具、たたみなど大分運び出したとのこと、えびす倉、浜町の借家も無事であり、まずは幸運な方であった。

（翌九日から十六日まで日記の記載なし）

5／17　火事の後は毎日のようにせわしく、板倉で十日も過ごした、まさか板倉で生活することになるとは夢にも思わなかった、実に人間の一生は何があるか分からぬものだ。

（二十六日まで記載なし）

5／27　父は大工と共に仮店舗の普請に忙しい、学校で二時から農業講話がある、仮店舗もようやく出来たのでたたみを入れた、先日仕入れに行った金物類が古英丸で着いた。

5／28　今日から仮店舗で営業する、町内のあちこちで普請をしていて賑やかだ、小野菓子店の建前があったが、五間に八間という立派な家だ、店にロープ、綿糸、漁具などを並べたが少しは店らしくなった。

5／30　夜九時ごろ、祝津で大火がある、外に出て見ると真っ赤な火の手が上がっているのが見える。

5／31　このところ貸し売りの入金が割りと順調である、これで火事でもなかったらどんなにか景気の良いことか。

6／1　火事の後なので外に出ると港内が見える、三間に四間の仮店舗だが、とにかく店が出来たので客も来てくれる。

6／2　学校の遠足で、沖村方面へ行くとのこと、夜九時ごろ帳簿の整理をしていると、また火事だという、出て見ると本の横の通り辺りだ、十一棟十七戸を焼いて十時過ぎに鎮火した、火の廻りが早かったので丸焼けになった人が多かった、大では鰊製品の入っている土蔵一棟を焼いて大損害だろう。

6／3　昨夜の火事には実に驚いた、大火があって一か月も経たないというのに、また浜町から火事が出るとは何たることだろう、丸焼けになった人が多いというが、実に気の毒なことだ。夜になってから暴風になり、えびす倉にいると恐ろしいようだ、もし昨晩もこんな風だったら、また大火になっていたろう、実に恐ろしい、新聞を見ると各地で火事騒ぎがあったようだ。

浜の世相を見る

高野名幸作さんの日記から【42】

――次号へ続く――

北海道・樺太・千島を探険
最上徳内 蝦夷草紙 を読んでみましょう

10

神事のこと

松前では正月になると、神社や家々で神楽（かぐら）を行う。神明宮の宮司が近在の者たちを集め、装束を整え、まず領主の表門から玄関に通りそこで獅子舞を舞う。それが終わると家中の武士の家を廻り獅子舞を舞う。また、町家にも廻り獅子舞を舞うが、町家ではこれを崇拝し新年のおめでたい行事としている。

また、八幡宮は領主の祈願所として、毎朝、神楽がある。八月十六日には祭礼があり、小松前の橋を境にして南北の町が二手に分かれ、南は飾り立てた船を引かせ、北は山車を引かせ、南北ともに子どもに狂言を演じさせ、負けず劣らずと美を競い合う。

ほかに正月には上野国（上ノ国）にある八幡宮と目名の毘沙門（びしやもん）へは領主の代参がある。

盆踊りには、十五歳以上の者は踊るようにとのお触れがあり、老若男女が群集して夜遅くまで踊り見物する。十四日から二十一日まで毎夜踊りがあり、これにより町中が大いに賑わうのである。

【注】　神明宮＝新明町にあるのでこの名があるが、伊勢神宮の神爾を受けて祀っている。

八幡宮＝以前は大館に祀られていたが、新しい社殿を松前に造営し、松前の氏神として多くの人の信仰を集め、大神宮と共に二社と称された。

上ノ国八幡宮＝松前家の先祖が上ノ国の館に館神として建てたものを改造した。

目名毘沙門＝目名は上ノ国の北にあり、この本尊は海中から引き上げたという金像の毘沙門で、後、火災に遭い、本尊もまた紛失したが翌年再建された。

蝦夷の島の形のこと

松前のあるこの島は周囲がおよそ八百里（三千キロ余り）、海岸には蝦夷人が多く住んでいるので通ることができるが、内陸は山岳の高低、原野の広狭、河川の様子などは全く分かっていない。

この蝦夷地の西北に当たるソウヤ（宗谷）の北にカラフト（樺太＝サハリン）という島がある。住んでいるのは蝦夷で、その広いことは蝦夷地にも負けないというが、その形はトビの羽を広げたようだと蝦夷は言っているが、漠然としている。

また、この西にサンタン（山丹・山靼）という国があるが、そこに住むのは蝦夷人とは別の人種である。これから満州一帯へは地続きである。

蝦夷の東北の地メナシ（目梨）の向こうにはクナシリ（国後）、エトロフ（択捉）の二島がある。これから北は赤人の住んでいるカムサスカまで、多くの島々が馬の蹄（ひづめ）のように続いている。さらにこのカムサスカ（カムチャッカ）の北にはチョウキチという異国があるが、最近は赤人に従っている。カムサスカから西は、赤人の王城のある地まで一帯の地続きである。まだ詳しいことは分からないが、僅かに赤人の一人から聞いたことを記しておく。

【注】　カラフトの蝦夷＝樺太に住む原住民としては、ギリヤークとオロッコと南部に住む蝦夷と呼ばれる三つの人種がいた。樺太の蝦夷はその生活や習慣が北海道の蝦夷とよく似ていて、常に北海道蝦夷やギリヤーク・オロッコ、山丹人らと往来し交易をしていたので、日本との関係も深かった。

モヨロ壺

―昔の人の生活の知恵―

使って便利な 柳行李

竹内コト

私のところには、私がまだ大事に使っている柳行李（やなぎごうり）がありますが、遠い昔を思い出します。

大正生まれの私は学校を卒業して間もなく、札幌の昔の一中前にあった家に奉公に出ました。着替えや洗面具から下駄の果てまで用意し、それらを入れるのに、行李を父が買って来てくれました。それを見てうれしいような、また、家を離れて見知らぬ土地へ行く不安やさびしさを感じたものでした。

そのころは、衣類や身の廻り品を整理するのに行李がよく使われていました。外へ働きにでる人たちも、行李をそのまま荷造りして送ったり、とても重宝な収納用具でした。

私の買ってもらったのは柳で作られたものですが、ほかに竹製のものもありましたが、これは値段も高かったようです。

行李は物を入れるのに使い勝手がよく、箱と違って弾力があるので見た目以上に物が入り、手ざわりもいいものでした。

奉公していて、そのころの一人暮らしだと、始めのうちは行李ひとつで十分でした。そのうちに着物も一枚、二枚と増えましたが、中身がふくらんで高くなっても、ふたの方も高さがあるので中に収まります。

ほんとに必要なものだけで生活している時代でしたが、家に帰るときにはその行李の数も増えていました。

いまは生活様式も昔とはすっかり変わってしまって、古い行李などもう見かけることもありませんが、ときどき出して見るたびに懐かしく思っています。私たちの若いころには、大事な嫁入り道具のひとつでした。

今はまた、昔の道具類の良さが見直されて、昔風の小さなたんすや座り机が売られていたり、振り子の柱時計が掛けられているのを見ることがあります。

ときどき昔のものに触れて見ては、今の時代の便利さを感じながら昔をしのんでいます。

× × ×

▽柳行李（やなぎごうり・やなぎごり）＝コリヤナギの枝の皮をむいて乾燥させたものを、麻糸で編んで作った行李。（明治時代には、コリヤナギは余市周辺が産地でした。）

―古平いろはうた―

⑰ 旅行村自然の中ではずむ声

昭和六十年代になり、生活意識の変化によって余暇を楽しむ時間が増え、一層のマイカーの普及などによって、優れた自然環境に親しむ家族や、小グループによる旅行が増加してきました。このような観光と自然に親しむレクリエーションに対処して、中規模観光レクリエーション地区（家族旅行村）の整備事業が制度化され、全国に作られるようになりました。

昭和五三年から始まったこの事業は北海道でも実施されることになり、古平町の外二、三の町村が名乗りを上げました。この事業を行う財団法人・日本観光開発財団が、それらの地域について自然条件、土地利用の状況、交通、周辺地域を含めた観光やレクリエーションの状況などを調査した結果、北海道での最初の『家族旅行村』の設置が古平町に決定したのです。

古平町は道央観光圏にあって、一五〇万都市札幌や小樽市に近く、ニセコ・小樽・積丹海岸国定公園の積丹半島にあって、同じ積丹半島の西側には、当時、すでに神恵内村青少年旅行村が開村していました。

家族旅行村の設定は、豊かな自然に恵まれた日本海の海辺と、森林と草原の広がる高原地帯の中で、手軽に楽しめる、健全で低料金な観光レクリエーション活動の場の確保を図りながら、地域経済の振興にも役立てようという願いがあります。

古平町家族旅行村の整備は、昭和五六年から六三年までに完了する計画で進められ、約三二ヘクタールの敷地に①積丹半島の宿泊などの拠点とする。②目的をもった観光地とする（海水浴・釣り・キャンプなどのレクリエーション・スキーなど）。③日帰りや短期滞在客が主体となるような基地とすることなどを目的に施設が整備され、駐車場などの施設の外、管理棟や管理体制も整えられました。

事業費は概算で約七億八千万円、町単独の事業費として二億三千万円が支出されています。

昭和六三年七月二〇日、古平家族旅行村開村式と祝賀会が行われ、翌日には早くもキャラバン隊が編成され、宣伝と客の誘致を目指して出動しました。

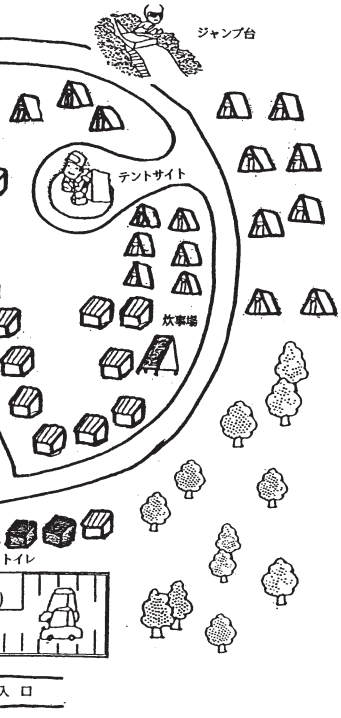
家族旅行村の利用者数は年により不同ですが、平成一二年の利用者は次のようでした。

キャンプ場・ケビンほか料金を徴収する施設の利用者

八、四一四人

スキー場　一〇、九〇七人

町内行事での利用者を含めて　三四、六〇一人



なお、旅行村の利用料金は次のようになっています。

キャンプ場

テント持ち込み　一、三六〇円

常設テント利用　三、一五〇円

ケビン

五人用　一二、六〇〇円

六人用　一五、七五〇円

寝具、炊事用具など必要なものはレンタルで利用できます。

町内の中学生が家族旅行村で一泊の野外活動を行い、自然の中で生活し、自然に親しむ機会をつくっています。折を見て、ときには町民の皆さん方も、高台からの眼前に広がる海や漁り火を眺め、静かな緑の大地の中で一晩過ごしてみてはいかがでしょう。

パンフレットも用意してありますので、ご希望の方は早速☎四二―四二〇〇番へお尋ねになってください。

孫

その後の孝ちゃん

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

二月四日。

「おじいちゃんが何時までも元気で長生きしますように」

と、一〇〇日祈願を終えた孫の孝ちゃん（孝文・七才）は、その後も神様えのお参りを続けている。

「おじいちゃんの為に一〇〇日もお参りをしてくれてありがとう。こんなに元気になったからお参りをお終いにしてもいいよ」

と、言ったのだが

「でも、ずーっとずーっとおじいちゃんと遊びたいから、ぼく続けるよ」

と言う。

つい先日の事。

「今まで、おじいちゃんと家のみんなが、元気で長生きしますようにとお願いしていたんだけど、孝ちゃんも元気でいますようにとお願いするのを忘れていたから、今日からお願いをしてもいいかねえ。おじいちゃん」

と尋ねられた。

「そうか。でもねえ。孝ちゃんが毎日お参りをしてくれたので、神様が『孝ちゃんも元気で学校へ行ったり、お友達と仲良く遊んだり、良い子になるように』と、高い高い空の上から見ているから、孝ちゃんも元気になるよ」

私の、とっさの返事に安心した孝ちゃんは

「ぼく。何もお願いしなかったけど、孝ちゃんのことも聞いてくれてありがとう」

と、再び手を合わせていた。

孫の清らかな心と、頑是ないお参りの毎日に触れた私は、小さい頃の我が家の事が頭をよぎった。

六十数年前の事。その日暮しの貧困にあえいでいた亡き父母が、何かにすがりたい思いと心の安らぎを求めて某宗教に入信した。

この教団は、町はずれの壊れかかった廃屋まがいの一室が教習所で、十人そこそこの信徒さんは、我が家と同じような貧しい境遇の者ばかりが集まった安堵の場ともなっていた。

夜遅く日銭を求めて帰って来た父母が、お参りとお祈りを唱えるのを見ていた私は、門前の小僧のなんとやらで、お祈りの言葉を覚え、教わるともなしに神棚の前に正座し、お祈りを唱えながら合掌していた。

思えば、私が孝ちゃんと同じ十才に満たない頃の事だった。

神仏を全く信じない私が、何時しか子供の頃に父母から教えられた

・私たちが神仏を信じれば、神仏が私たちを守ってくれる。
・私たちの行いを神仏が見ていてくれる。
・人を騙しても神仏は騙せない
・他人に尽くせば神仏がお返しをしてくれる。
・貧しさに耐えれば神仏が福を授けてくれる。

という人間と神仏の条理を思い出し、遅まきながら、孫に手を引かれながら一緒にお参りするのが日課となった。

×　×　×

父母から教えられた神仏に対する敬いと感謝の心が、純な孫の一〇〇日祈願によって数十年振りに甦り、私と孫の二人だけの合掌の日々が続いている。

神仏を是とし、崇敬を美化するものではないが、私にとっては将に『背負った孫に教えられた』出来事でした。

断章小説【ふるさと遥か】第23編

戦闘

吉川義雄

グラマンと、P38戦闘機の攻撃は執拗を極めていた。始めから飛行場周辺の火力を制圧するつもりらしく、最初はモロトフのパン籠と異名のある人畜殺傷爆弾を雨と降らせ、飛行場の周りに形ばかり設けてある、数少ない貧弱な機関銃座を目の仇にして攻撃を仕掛けて来た。

上空で、次から次と反転しては銃座に向かって機銃を打ち込んでくる。戦闘としてはまるでアベコベである。幾つかの銃座は沈黙してしまった。

上田兵長は建物の陰からその様子を見ていた。整備科と兵科の違いはあるが、いざとなれば機関銃ぐらい撃てるから、これだけコケにされて、敵機の一機も撃ち落とせない味方の銃座の情けなさにイライラしてきた。

彼は、一番近くで奮闘している銃座の連中のことはよく知っていた。

甲板係という任務の恩恵は、部隊の中で一目おかれる配置と同時に、思いきった仕置きもできた。酒が無くなれば製糖工場にクレーン車で押しかけ、砂糖から採った純粋のアルコールをドラム缶で配給した。直属の将校も下士官もあきれて、彼の好きなようにさせた。

銃座を守る兵たちを、彼は最初のころ、兵科の違いから無関心で側を通っていた。ある日通りかかったとき、猛烈な訓練の様子が彼の目に飛び込んできた。18ミリ単装機銃だけの銃座だから、三人もいれば事足りるはずだが、五人ほどの兵が隊長の兵長にシゴかれていた。全員が国民兵であった。三十歳前後の兵が、若い兵長から「このバカッたれッ」と殴られ、「何回言えば分かるんだッ」とけとばされていた。

赤紙で集めたはいいが、頭数を合わせただけで、実戦にはまるっきり役に立ちそうもない人たちの、吹きだまりみたいな姿に上田兵長はやるせない思いでそれを見ていた。

以来、彼は通る度に、人数分の菓子やアルコール、果物をその銃座に届けた。

「上田さんのおかげでやる気が出ました」「私は信州の上田です」「千葉の漁師です」と、彼等はそれぞれふるさとを告げて好意を謝した。全員が妻帯者で子どものいる者もいた。

ついに銃座が沈黙した。銃座を囲む土塀から頭を出す者もいなくなった。

彼は飛び出していた。銃座までは五十メートルほど。彼は夢中で走った。そうしないではいられなかった。素朴を絵に描いたような仲間が、今どうなっているのかを知りたかった。

彼はひらりと壕の中に跳び込んだ。無傷の者は誰もいなかったが、全員生きていた。

戦意は無くなっていた。震い上がる最初の戦闘体験に、小便を垂れ流しながら黙っていたのだ。

戦争は美しいものでも、英雄をつくるものでもない。二十世紀は殺りくの世紀であった。

どこかで誰かが止めなければ、平和の光りがふりそそぐ新世紀は来ない。鍵は一人ひとりの平和を願求する心の中にしか無い。

彼は大急ぎで兵たちの傷を調べてから、みんなを一喝した。

「弾はあるんだなッ。よし俺に撃たせろ、必ず助けるッ」

銃身は冷えていた。百発も撃てばフランジ（放熱器）が熱くなるぐらい分かっている彼は、慎重に銃口を一番近いグラマンに向けた。安心しきって速度を落としているグラマンの尾部が砕けて、キリキリと落下していった。

＜この稿終わり＞

短歌

古平町岬短歌会詠草

杖つきて一段いちだん両足を揃へてはのぼりゆくもどかしさ　竹内コト

遠き日の子らを寝かせし子守歌今抱く曾孫に歌ひて居りぬ　池田テル

伸び立ちし公園の木々を窓に見てわが住む家に心安らぐ　榊佳代

長電話の同じ話にもうなづきて終りしときに眩暈おぼゆる　奥山きよみ

波の上を群れとぶ鴎にもリーダーゐて一羽の後に向きを変へゆく　堀典子

それぞれの生き方話し昼餉とる年齢の差忘れひととき過ごす　田中香苗

融けてゆく雪をいたわる如く吹く夕べの風のやわらかにして　山口スヱ

おだやかに広ごる石狩の海の向かふの雪を頂く増毛連山　鈴木時子

赤松の枝を支へし吊縄の少しのびきて春の日に揺る　丹後初江

俳句

古平ホトトギス会

蕨採り通ひ慣れたる好きな径　斉藤波留

春惜しむ八十路の母の薄化粧　山口悦子

吾が庭の一番咲きはチューリップ　越野敏雄

春耕や八十路の気質抜け切れじ　大和田絵伊

春日中鴉軍団鷲狙ふ　福井幸平

春耕や何植えべきか思案もし　関口勝志

日帰りの車窓を走る月涼し　よしざきり

連休の花見の話終るまで　仲谷比呂古

鱈頭鍋割れるほどもてなされ　越野清治

我が庭の桃の苗木の色めけり　室谷弘子

四五軒の群来たる村や桐の花　岩瀬みのる

川柳

小泉さん三度目の正直首相の座　石井愛子

孫達の背なの大きさ婆ちぢむ

新旧の町長戦に力入れ